

# 「事業継承×イノベーション」 MBAでの学びと視野で、地方の未来を切り拓く。

## 株式会社虎屋本舗

### 会社概要

創業400年、福山市に本店を構える老舗和菓子店、株式会社虎屋本舗。オンラインショップを含め11店舗を展開する。「せとうち和菓子キャラバン」事業は外務省「ジャパンSDGsアワード」に入賞。副社長の高田海道氏は17代目に当たる。



取締役副社長  
**高田 海道** (33才)  
KAIDO TAKATA

従業員数 / 88名  
勤続年数 / 8年目

- 2013年 / 福山に帰郷し家業へ
- 2015年 / グロービス経営大学院入学
- 2018年 / MBA取得  
第2回ジャパンSDGsアワード  
「SDGsパートナーシップ賞」受賞
- 2020年 / 2021年 <チームNTT in 広島>  
TOKYOオリンピック聖火ランナーに決定



## 「地方の中だけで話しても新しい価値は生まれにくい」、17代目が感じたギャップ。

「後継者だからと地元ではちやほやしてもらえるけれど、かといって経営に詳しいわけではない。懸命に働いてくれる社員の後ろ姿を日々目にするけれど、地方のマーケットは縮小の一途・・・そんな状況に不安を感じたのが、MBAについて考えた最初の動機でした」と語るのは、創業400年の老舗・虎屋本舗の17代目で副社長取締役の高田海道氏。早稲田大学政治経済学部を卒業し不動産や議員秘書として勤務、2013年に帰郷し家業へ足を踏み入れた。それまで働いた東京と地方都市・福山の情報格差に驚きつつ、地元の経営者たちと交流を深める日々が続いたが、1年もすると「地方の中だけで話していても新しい価値は生まれにくい」と感じるように。「経営者として、ファイナンスやマーケティングを広い視野で学びたい」と県外のグロービス経営大学院でのMBA取得を考えたという。

## 学びから閃いた新事業で、 外務省・ジャパンSDGsアワードに入賞。

日本について書かれた名著を使ったケーススタディを、在学中最も印象に残った授業として挙げた高田氏。学びの中で「SDGsは、日本人にとってはアイデンティティに組み込まれている言葉」だと実感すると同時に「手軽に美味しいお菓子が買える今の時代に和菓子が売ることができるのは、文化であり地方のストーリー」だと確信を持った。和菓子作りを通じ、ダイバーシティの中で郷土文化の継承を行う「せとうち和菓子キャラバン」は、その閃きから発芽した事業である。職人が離島など瀬戸内海地域を訪れ、地元の特産を使ったお菓子を高齢者や障がい者、子どもと一緒に作り他の地域でも販売する。郷土文化の継承と育成という大きな社会的使

命を果たしながら、企業ブランディングやマーケット開拓までカバーするこの事業は、2018年、外務省の第2回「ジャパンSDGsアワード」で「SDGsパートナーシップ賞」を受賞。賞をきっかけにコロンビア大学の学生に和菓子について教える機会を得たりと、国を超えた人脈を築くほどの大きな飛躍だった。

大学院での学びはまた、企業の経営者としても大きな変化をもたらした。以前は、400年続く家業を継承するという重圧に不安もあった。しかし「ファミリービジネス・マネジメント」や経営の実務を学び定石を理解したことで、危機的状況に陥っても迷うことなく判断を下せるようになったという。

## ファミリービジネスの脱却を後押ししてくれた、 父との固い絆。

金銭的・時間的負担への覚悟や、社長で16代当主の父・信吾さんを説得する必要もあった。イノベーション人材等育成事業補助金について聞いた時には「この機会を最大限で活用したい」とすぐに応募を決めたが、先代に打ち明けたのは合格後補助金も決定してから。しかしこの会話は、二世代の事業継承者が心の内を語り合う良い契機となった。MBA取得がどう会社に貢献できる

かを説明してみせた高田氏が聞かされたのは、先代がかつてMBA取得を希望しながら金銭的な事情であきらめたこと、そして目まぐるしい時代の変化に戸惑っているという本心だった。事業継承者としての責任と地方経済を担う経営者としての使命、そして、ファミリービジネスという閉じた環境から踏み出すことを許してくれた父親への感謝。様々な思いを胸にしての進学は、老舗和菓子店に新たな息吹を吹き込むことになる。

## 事業継承者にも起業家精神を広島の未来を担う 新たな土壌を創る。

高田氏が次に目指すのは、アートとしての和菓子文化の創造だ。「見るだけのアート」から「体験するアート」へと変遷した近年の芸術において、和菓子を作る過程の中に社会的・芸術的価値を捉える同社の取り組みは、まさに芸術そのもの。「和菓子屋として初めて瀬戸内国際芸術祭に出る企業になりたいですね」と目を輝かせる。

挑戦を続けるのは、会社を支える和菓子職人たちへの想いからでもある。「モノを創る人」の感性の文化を、言葉やデジタルに無理に変換せず、どう伝えていけるのか。首都圏には真似できない地方の良さを、どう次の世

代へ、次の土地へと伝えていくか。継承をする者には伝承の責任があり、そこには時代に合致したイノベーションが必要だと高田氏は言う。

多くの中小企業を抱える広島県にとって、事業継承は県の未来を担う大きな課題だ。「『跡継ぎ』には、既存の製品とすでに開拓された市場があります。でも、それだけではこれからの時代は生き残れない。継承を基礎に、いかにしてベンチャーのようなスピード感でイノベーションを起こすか。事業継承者であっても、起業家精神が必要なんです。これまでの枠組みを飛び越えたアントレプレナーの土壌を、ここ福山から醸成していくつもりです。」

### イノベーション人材等育成事業補助金ご利用希望の方へ

広島を起点とし、内発的にも外発的にも様々なイノベーションの契機となる非常に有用な制度だと思います。大学院で学んだことを元にさらに一歩踏み出すことができれば、企業としての飛躍を、売上や利益といった具体的な数字で実感することが必ずできます。事業継承者の方も「ファミリービジネスの呪縛」であきらめるのではなく、志をもってチャレンジして欲しいと願っています。